

〈特集〉

大手前大学国際看護学部小児看護学領域の教育実践

高谷 知史¹⁾・野間 洸佑¹⁾・中口 尚始²⁾・西村 直子¹⁾

1) 大手前大学国際看護学部 2) 京都府立医科大学医学部看護学科

要約

小児看護学領域では、学生が4年間で獲得できる学修内容を「大手前キャスルモデル」として作成している。領域内の科目として、2年次に「小児看護学概論」、「多様性と子ども」、3年次に「小児看護学援助論Ⅰ・Ⅱ」、「小児看護学実習」、4年次で「看護研究Ⅱ」、「統合看護学実習」を教授している。そして、それぞれの科目で特色のある取組を行っている。実践力の強化のために、「小児看護学援助論Ⅰ・Ⅱ」では、Team-Based Learning (TBL) によるロールプレイ演習や Objective Structured Clinical Examination (OSCE) 形式の実技試験等を取り入れ、子どもとその家族へのかかわり、健康レベルにあわせたアセスメントと看護介入を思考、行動できるようにしている。また、国際力強化を目的に、学生が英語のロールプレイ演習を行う等の取組も行っている。さらに、「小児看護学援助論Ⅰ」では、今年度より英語のロールプレイに Information and Communication Technology (ICT) を取り入れ、学生が多様な背景のある子どもと家族へのかかわりを学ぶ機会を提供している。

キーワード：小児看護学、TBL、協働学習、Objective Structured Clinical Examination (OSCE)

Pediatric Nursing Education and Practice at Faculty of Global Nursing, Otemae University

Abstract

In the division of pediatric nursing at Otemae university global nursing has “Otemae Castle Model”, that is grand design. The grand design has been created to provide students with the academic content they can acquire in four years. As subjects in the area, the department teaches “Introduction of Child Health Nursing” and “Diversity of Child Health” in the second year,

“Child Health Nursing Care I”, “Child Health Nursing Care II” and “Child Health Nursing Practicum Care” in the third year, and “Nursing Research II” and “Comprehensive Nursing Practicum” in the fourth year. And each subject has its own distinctive approach. In order to strengthen practical skills, “Child Health Nursing Care I & II” incorporates role-playing exercises using TBL and OSCE-style practical examinations to enable students to think and act on their involvement with children and their families and on assessment and nursing intervention according to their health level. In addition, students are also encouraged to participate in role-play exercises in English to strengthen their international competence. In addition, in “Child Health Nursing Care I”, ICT has been incorporated into the English role play from this year to provide students with opportunities to learn how to relate to children and families with diverse backgrounds.

Keywords: Child health nursing, TBL, Cooperative learning, OSCE

I. 大手前キャッスルモデルと3つのポリシー、グランドデザイン

大手前大学国際看護学部は2019年より開学した日本初の国際看護学部である。その教育の特徴として、3つの力「学士力」「実践力」「国際力」を掲げグランドデザインを構成している。本学部では、国際、基礎、成人、高齢者、母性、小児、精神、在宅の8領域それぞれが、3つの力を学生が獲得できるように領域モデルを作成しており、小児看護学領域は学生が4年間で獲得できる学修内容を大手前キャッスルモデルとして作成している(図1)。小児看護学領域は、2年次に「小児看護学概論」、「多様性と子ども」、3年次に「小児看護援助論Ⅰ・Ⅱ」、「小児看護学実習」、4年次で「看護研究Ⅱ」、「統合看護学実習」を教授している。

講義科目の初回講義のコースガイドで領域モデルを用いて、小児看護学領域の科目の4年間の流れ、学生のレディネス、国家試験とのつながりを説明している。各学年で小児看護において獲得する能力についてテーマを設定し毎回の講義で示している。これらのテーマは2年生「子どもに関心をもち自分の子ども観を発見する」、3年生春学期「子どもの持つ力を知る」、秋学期「子どもの持つ力を信じ引きだす」、4年生「子どもへの看護を創造する」としている。

各科目の概観は次章で述べるが、「実践力」の獲得については「小児看護援助論Ⅰ」でバイタルサイン測定の実技テストを実施し、学生個人が小児に特徴的な手技を理解し臨地で実施できる能力を獲得できるようにしている。また、「小児看護援助論Ⅰ・Ⅱ」両科目においては、看護技術と合わせて事例で看護過程を展開している。Team-Based Learning(以下、TBL)を取り入れ、グループでロールプレイを演示することで技術、事例の理解、子どもとその家族へのかかわり、健康レベルにあわせたアセスメントと看護介入を思考、行動できるようにしている。

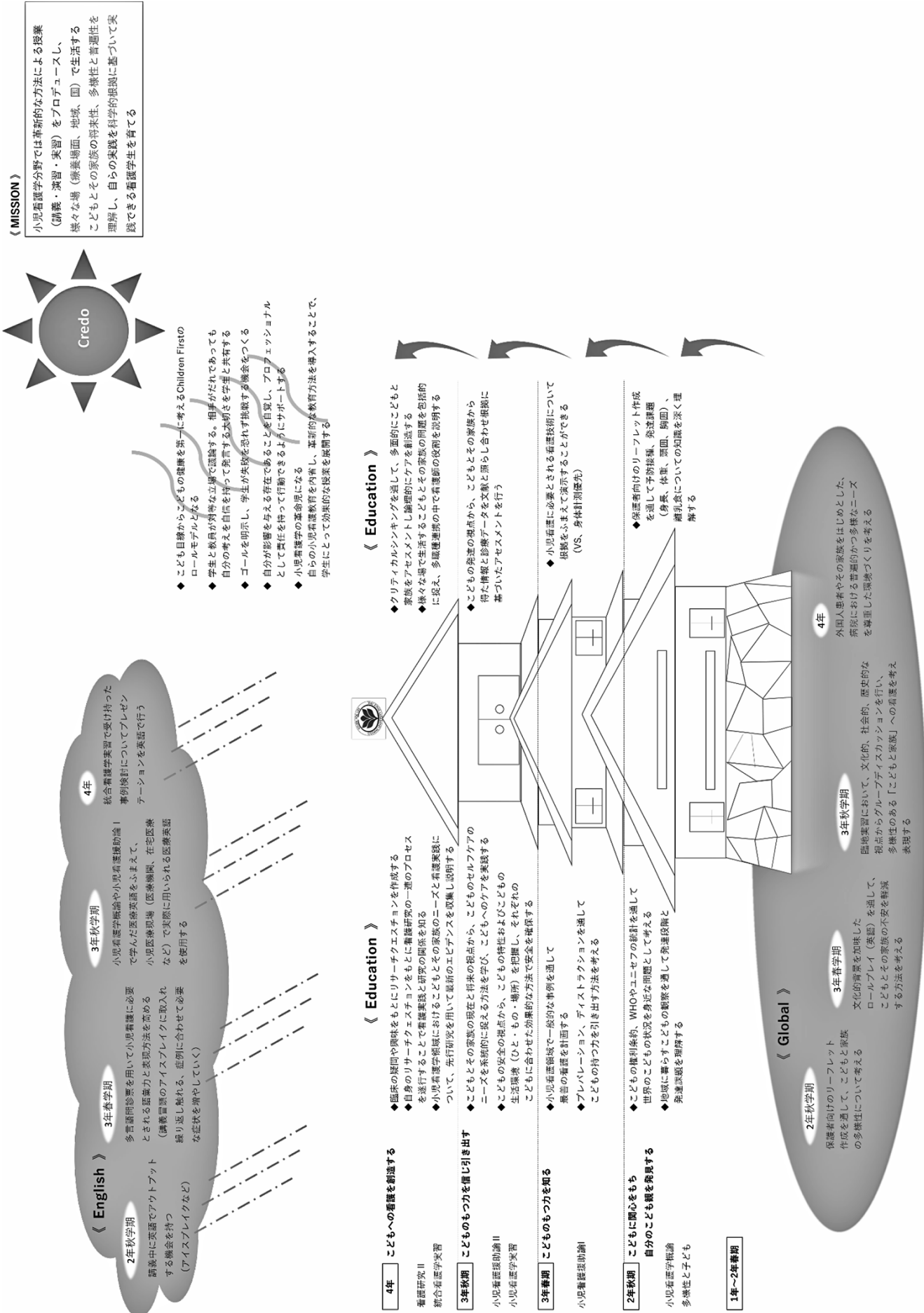
「国際力」については、「多様性と子ども」では、子どもとその家族への支援の場は医療機関にとどまらず、療養の場が多様であること、国、地域、宗教や民族などの多様性を理解し看護ケアを思考できるようプレゼンテーションを課題としている。また、講義スライドは重要な単語を日本語、英語併記している。さらに、「小児看護援助論Ⅰ・Ⅱ」で、各1コマずつ英語

でロールプレイを学生が実践している。これらの取組を行うことでディプロマポリシーに掲げられているグローバルな視野にたった知識、技術、態度の修得に向けて教育を実践している。小児看護学領域の科目の概観と特徴、「小児看護援助論Ⅰ・Ⅱ」での実践力強化の取組、国際力強化の取組について後述する。

II. 2～3年次の小児看護学領域科目の積み上げ、科目の概観

「小児看護学概論」は1単位8コマの講義で、小児看護を実践するために必要な小児の特性と健康障害についての基礎知識を理解することを目的とした内容である。「多様性と子ども」も1単位8コマだが、国内外の子どもを取り巻く政策、医療、保健について学び、看護職としての役割を多面的に考察できる視野の涵養を目的としている。大きな特徴として、貧困やテロリズム、難民の大量発生などの国際的動向や家族形態の多様化といった社会状況を踏まえ、学生が協同学習のもと「子どもとその家族」の人としての共通点と歴史、文化、宗教的な背景をふまえた多様性についての理解を目指している。

「小児看護援助論Ⅰ」は1単位15コマの講義・演習科目で、小児期特有の病態や診断、治療、予後、看護について講義と演習を通じて系統的に学習する内容である。演習ではTBLによるロールプレイ演習を通して、小児看護の技術と知識の理解を深める。特にバイタルサイン測定では、ロールプレイ演習の後にObjective Structured Clinical Examination(以下、OSCE)形式の実技テストを取り入れ、客観的臨床能力の向上を目的として実施している。同じく「小児看護援助論Ⅱ」も1単位15コマの講義・演習科目で、白血病の事例を中心に看護過程と小児看護実践の習得を目的として、ジグソー法を用いたグループワークやロールプレイを行う。その一環として、臨地看護師による講義・演習を取り入れたユニフィケーションを行い、実践的な小児看護の知識と技術の習得を図っている。さらに、15コマのうち3コマを「小児看護学実習」と並行して実習施設および大学内でフィールドワークと講義を行い、実際に体験した子どもの生活環境や受診環境の特徴を理解し、安全・安楽かつ子どもの成長発達を促すことを考慮した環境を整えるための看護実践を学生が考察できる機会としている。



さらに「小児看護学概論」「多様性と子ども」「小児看護援助論Ⅰ」「小児看護援助論Ⅱ」では英語を併記した授業資料を活用するとともに、演習では医療英語や多言語問診票を用いたグループワークやロールプレイを取り入れるなど、多様化する医療現場でのグローバル人材育成を目指している。

「小児看護学実習」は2単位2週間で、うち1週間が保育機関で「健康な乳幼児の看護実習」、残り1週間が病院で「健康障害のある小児の看護実習」として入院中の小児の看護過程の展開を実施する。病院では急性期から慢性期まで実習学生によって様々な患児を担当する。

最後に、「統合看護学実習」は2単位2週間の実習では、看護学実習の集大成としてうち1週間は病院で看護管理者実習と複数受け持ち実習を並行して実施し、残り1週間は地域で生涯発達を支援する看護職者の役割を学ぶ。

Ⅲ. 小児看護援助論Ⅰ・Ⅱの取組

1. 小児看護援助論Ⅰ

A. 授業形態

本授業は、1回90分1コマの授業で、計15回の授業のうち、1回目はコースガイドとして本授業の学習目標、授業内容、授業進行（アクティブラーニングに関する説明を含む）、評価方法等について詳細なオリエンテーションを行う。2回目以降は、1) 小児特有疾患や症状に関する知識、2) TBLによる看護実践能力、3) タスクトレーニングならびにOSCEによる実践・評価、といった3つのユニットで構成されている。

1) 小児特有疾患や症状に関する知識ユニット

2023年度は、小児特有疾患や症状に関する知識を修得することを目的として、先行する計6回の講義の中において、呼吸器、消化器、循環器、腎・泌尿器、感染症、先天性疾患に関する病態・治療・検査等に加えて、発熱、嘔吐・下痢、脱水等の小児によくみられる症状マネジメントについて教授した。各回の冒頭では前回授業の確認テストとその解説（10分程度）を行い、知識の定着化を図った。

2) TBLによる看護実践能力ユニット

2023年度は、子どもや家族とのコミュニケーション能力を含む看護実践能力を修得することを目指して、特定の子ども事例（循環器疾患をもつ乳児とその家族）に必要なコミュニケーション方法や看護ケアを検討し、ロールプレイを実施した。また、3つの異なる看護場面（呼吸アセスメント、症状アセスメント、清潔ケア）を設定し、TBLによるロールプレイ演習に取り組んだ。TBL演習では、1グループあたり3～4名で11グループ（チーム）を編成し、グループ（チーム）毎に以下に取り組んだ。

(1) 演習に向けた事前課題の共有

(2)以降のTBLにおけるグループディスカッションやフィードバック、ロールプレイが効果的かつ円滑化を目的として、子ども事例について、知識・技術・態度の観点から構成される事前学習を課した。それらの事前課題については、その授業回が行われた週内で迅速に本学が独自に開発したInformation and Communication Technology（以下、ICT）教育システムである総合学修システム「el-Campus」を用いてフィードバックし、次の演習に向けて活かせるよう工夫した。

(2) 子ども事例の看護過程に関する事前課題の共有

「データベース」「情報収集」「アセスメント（ケアの根拠）」「看護問題・計画の立案」「行動記録（シナリオにかかる行動目標・計画）」で構成されるワークシートについて、段階的に事前課題として準備するようにした。それらについても、(1)同様のフィードバックを行った。

(3) 異なる看護場面におけるシナリオの作成

以下、3つの異なる看護場面において、各グループ内で看護師役、家族役、オブザーバーの役割を決め、それぞれのセリフや行動について詳細なシナリオを作成した。また、各場面において、子どものみならず家族看護の視点から、付き添う親の状況をふまえたニーズや対応を考えた。

【看護場面①】循環器疾患をもつ子どもの呼吸アセスメント

呼吸器のアセスメント項目ならびに呼吸ケアに関する知識・技術を整理した上で、入院からの経過、子どもと付き添いの保護者への心理的サ

ポートをふまえた声掛けや配慮をしながら、バイタルサイン測定を行った。

【看護場面②】心不全の経過観察ならびにアセスメント

循環器疾患をもつ子どものフィジカルアセスメント、輸液療法中の子どもへの安全・安楽な看護、安全な体重測定（水分代謝のアセスメント含む）を行った。

【看護場面③】心負荷を最小限にする沐浴の実施

心負荷を最小限にする沐浴の方法について検討し実践した。その際、沐浴中～後にかけて、循環動態の観察・評価の観点から観察項目を整理して取り組んだ。

(4) ロールプレいの予行演習とその実践発表

(3) で作成したシナリオをもとに、グループ毎にロールプレいの予行演習を行い、看護教員は親あるいはオブザーバーとして参加し、その場でフィードバックを行い、その後の実践発表に向けて改善する機会とした。実践発表では、全グループの前で実践し、各グループから良いと思った点や質問・感想といったフィードバックを受けるようにした。

3) タスクトレーニングならびに OSCE による実践・評価ユニット

2023年度は、3つの小児看護技術（バイタルサイン測定、身体計測、輸液管理）について、小児のモデル人形を用いたタスクトレーニングを実施した。また、バイタルサイン測定においては、OSCEを参考とした手法を用いて実技テストによる評価を行った。

(1) タスクトレーニング

3つの小児看護技術（バイタルサイン測定、身体計測、輸液管理）のトレーニングにあたって、事前課題として、小児のバイタルサイン測定の基準値、発育評価の方法（計算問題含む）、子どもの輸液管理に関する成人との違い等、それぞれの技術に関する基礎知識の学習に取り組んだ上でタスクトレーニングに臨んだ。

バイタルサイン測定では、モデル人形（新生児バイタルサインモデルⅡ型 LM-098）を用いて、22項目からなるチェックリストに沿って測定手技のト

レーニングに取り組んだ。身体計測では、乳児モデル（コーケンベビー LM-026）を用いて、チェックリストにしたがって、身長、体重、頭囲、胸囲の測定を実施した。輸液管理では、小児の点滴挿入時の介助方法やテープ固定の方法について、グループワークや教員によるデモンストレーション、ロールプレイを通して学修した。

(2) OSCE

実技テストでは、必要物品の動作確認・準備から始まり、患児（モデル人形）の病室へ入室し、周辺環境整備、子どもや家族への必要な声掛け、子どもへの測定の留意点をふまえた技術、特定の状況時の対応（例えば、啼泣時）等に関する22項目から構成されるチェックリストを用いて評価した。実習室内に患者の病室とベッドを模倣した空間を設営し、上述したタスクトレーニングの際と同様のモデル人形を用いた。評価体制は、評価者（看護教員）1名に対して学生1名、制限時間は6分間で行った。なお、実技テストに向けた自主トレーニング期間として約3週間を設定して実習室を開放し、その期間中は看護教員1名がラウンドしながら適宜、看護学生からの質疑応答や技術指導を行うようにした。

B. 授業の効果と課題

1) 小児特有疾患や症状に関する知識ユニット

講義でインプットした知識を確認テストでアウトプットする、このような反復学習を形式的に行うことによって、知識を効果的に習得することができたと考える。しかし、パソコンによる教務システムソフトウェアを使用した確認テストを実施しているため、授業データ資料のコピー&ペースト、検索エンジンによる設問キーワード検索等といった知識確認テストの目的を逸した状況も見受けられた。したがって、国家試験問題の転用や授業資料がそのまま解答になるような設問は極力避け、授業内容から思考したり、計算したりして解答する設問が有用であると考えた。

2) TBLによる看護実践能力ユニット

3つのシナリオベースで、事前学習・グループワーク（ディスカッション）・ロールプレイ・フィードバックに取り組むことによって、子どもや家族へのコミュニケーション方法に加えて、子どものフィジカルアセ

メントの知識・技術を修得する機会になったと考える。一方で、時間的な制約からシナリオ作成に終始してしまう状況であった。そのため、ロールプレイの際には、シナリオ暗記まで及ばず記載したシナリオメモを閲覧しながらの演示であったため、役割への没入は難しく教育効果への限界があった。シナリオ数を減らして時間的余裕をもって演示する等の工夫が必要となる。

3) タスクトレーニングならびに OSCE による実践・評価ユニット

代表的な小児看護技術の手技獲得に向けた事前学習とタスクトレーニングによって、一つ一つの手技の根拠を確認しながら実践に臨むことができ、エビデンスベースの技術修得をすることができたと考える。また、OSCE では、6分間でバイタルサイン測定を実施するという臨地での実践に近い形式としたことで、緊張感と実践感をもって取り組むことができたのではないかと考える。しかし、OSCE において、制限時間内に全てのチェックリスト項目を完了させることを目的と捉えて手技や子どもへのコミュニケーションが疎かになる場面も見られた。そのため、OSCE の目的、測定手技の確実性、子どもとのコミュニケーションを通じた双方向性の看護の必要性、測定結果のアセスメント等を学生が意識した実技テストとなるよう工夫が必要である。

2. 小児看護援助論Ⅱ

A. 授業形態

本授業は、小児看護学実習に臨む前段階の演習科目にあたり、小児看護援助論Ⅰに比べて、より実践重視型の科目構成となっている。科目構成は、大きく分けて、第1～12回までの「学内演習型」と第13～15回の「フィールドワーク型」の2つのユニットに区分されている。前者では、知識構成型ジグソー法やロールプレイを用いた TBL を通して、看護過程の展開により重点を置きながら、実践重視型の子ども看護過程演習を展開していることが特徴である。一方、後者では、臨地実習施設（医療機関、保育機関）および学内において、健康障害の有無にかかわらず「子どもの安全・安楽／成長発達」の視点から、臨地における「ひと・

もの・こと」のあらゆる生きた環境を教材としてフィールドワークを行い、地域で暮らす子どもの安全、子どもに適切な入院環境、輸液管理中の子どもの看護を学修する機会としている。

1) 学内演習型ユニット

(1) ジグソー法による看護過程の展開

知識構成型ジグソー法は、アクティブラーニングの一つで、グループ内のメンバー同士の関わり合いを通して、一人一人が学びを深めることができる。これは、1つの課題（問い）を3～4つの知識のパートに分け、それぞれの知識パートを担当するメンバーを決め学習を深める。次に、担当した知識パートの深めた学習内容を、他の知識パートを担当したメンバーと共有して、お互いに深めた知識を説明し合い、ジグソーパズルを解くように協同しながら課題（問い）への答えを作る学習法である（東京大学 CoREF, 2018）。

本授業では、4～5名で1つのグループを構成し、約20の基本グループを編成した。各基本グループ内で、各学生は1つの子ども事例（急性リンパ性白血病に対して入院して化学療法を行う学童事例）に対して、4つのアセスメントパート（身体面・心理面・社会面・発達面）に分かれて担当し、それらのパートの情報整理とアセスメントをそれぞれ担当した。グループワークでは、教員が巡回し、質疑応答を行った。

次に、担当した同じアセスメントパートの学生同士で集まり、グループワークを行い、担当するアセスメントパートの学習を深めた（エキスパート活動）。

その後、基本グループに戻り、それぞれが担当したアセスメントパートについて、グループ内の他メンバーとお互いに説明し合うことによって統合アセスメントを行い、看護上の問題の抽出と看護目標・計画の立案を行った（ジグソー活動）。

最後に、それぞれの基本グループが「統合アセスメント」「看護上の問題」「看護目標・計画」を発表し、子ども看護過程に関する理解を深めた（クロストーク活動）。

(2) ロールプレイによる検査時の看護実践

検査時の看護に関するロールプレイでは、子ども事例にある患児をそのまま引継ぎ、その患児のニー

ズや背景をふまえた上で、必要なコミュニケーション方法やケアについてグループワークで検討した。そして、シナリオを作成し実演することで、検査時の看護実践能力として重要なポイントに関する学修を深めた。

2) フィールドワーク型ユニット

(1) 保育機関における環境探検

看護学生は、保育機関の了承を得て、園児の安全・安楽や成長発達に影響すると考えられる保育環境（ひと・もの・こと）を静止画で撮影し、所定のフィールドノートに観察したことをまとめ、子どもの安全・安楽や成長発達に配慮した環境と園児の特徴や地域で暮らす子どもの安全についてディスカッションを行った。

(2) 医療機関における環境探検

看護学生は、病院内あるいは病棟内の環境（ひと・もの・こと）を探索（観察）し、医療機関における安全・安楽や成長発達に応じた環境と患児の特徴、子どもに適切な入院環境について、所定のフィールドノートにまとめディスカッションを行った。また、実際に輸液管理中の患児を観察したり、臨地の看護師から患児の輸液管理方法の実際や留意点等についてヒアリングしたりすることによって、安全・安楽な子どもの輸液管理についてディスカッションした。

B. 授業の効果と課題

1) 学内演習型ユニット

ジグソー法ならびにロールプレイを用いた実践重視型子ども看護過程演習では、協同学習として取り組み、それぞれの役割と責任を認識した学習行動を取ることができた。その中で、自身と他学生の意見や考えを比較検討しながらグループワークを行い、チーム内における役割意識や看護過程にかかる自身の理解を省察することで、子ども看護過程の学修を深めることができたと考える。実際に、協同学習に取り組むことで、「自分の考え方が間違っていないと安心した」「他の学生のアセスメントの視点を聞いて自分にはない新たな視点でとても勉強になった」等、学生からのポジティブな反応が得られた。一方で、「取り組むことが複雑で混乱する」「チーム内で発言にばらつきがある」

「チーム内の学生間で貢献度に差がある」等の反応もあり、協同学習の効果が低下するような状況もあった。そのため、オリエンテーションによる図示などによる授業進行の理解の促進や、学生間のピア評価を導入する等、学生が目的と方法を理解して取り組み、個人、グループ評価を明確にした授業設計の工夫が必要である。

2) フィールドワーク型ユニット

学内の講義や演習では経験することが難しいリアルな子どもの生活環境や小児看護技術のフィールドワークから、これまでの授業で学んだ、子どもの安全・安楽や成長発達に影響する環境に関する学びを、小児看護の実質的な知識・技術・態度へと昇華することができたと考える。しかし、当然ながら、多様なフィールド間で体験する環境の差異（例として、患児の年齢や疾患／治療状況、物理的な病棟構造、看護人員配置など）が生じるため、学びの質の均一化を意図した教員によるフィードバックが重要となるだろう。

IV. 国際力への取組

1. 英語のロールプレイへの ICT 利用

1) 演習の概要

2023年度より、『小児看護援助論 I』のロールプレイで情報通信技術 ICT を活用した教授方法を用いた。ロールプレイの目的は、「多様性を持つ対象者（子どもと家族）へ向けた英語を中心としたコミュニケーションが取れる」とした。また、事例は、英語を第2言語とする子どもと家族で、「バイタルサイン測定」「身体計測」「輸液」のいずれかの看護技術を受けると設定した。

2) 演習の内容および進行について

(1) 事前課題：シナリオ作成、ロールプレイについて

3～4名を1グループとし、3つの看護技術をグループ毎に1つずつ割り当て、学生はシナリオを作成した。また、シナリオは、科目内の演習で使用したチェックリストを参考にして実施項目やその表現を検討することとした。さらに、シナリオ内の会話は、簡単な英語や、授業内で学習した表現を用いるようにした。

そして、グループ毎に作成したシナリオを使用しロールプレイを行った。配役はグループ内で看護師役と家族役を決め、子どもはモデル人形を用いた。各シナリオで、制限時間を5分以内と設定し、ロールプレイの様子は、動画撮影し、クラウドシステムを用いて学生が授業時間内に視聴できるようにした。

(2) 授業内の演習内容：ディクテーション、プレゼンテーション・ディスカッションについて

ディクテーションは、個人単位で実施した。時間は40分間とし、自グループ以外の動画を視聴しながら、動画内の会話内容の書写を行った。ディクテーション終了後に、グループ毎にプレゼンテーションとディスカッションを、録画映像を再生しながら実施した。

3) ICT 活用による多様性を持つ子どもと家族とのコミュニケーションへの効果と課題

2023年度の演習では、事前にロールプレイの動画を撮影するようにしたことで、学生は、英語が第2言語である多様性を持つ子どもと家族に対して、わかりやすく伝わりやすい英語表現（短い文で話す、ゆっくり大きな声で伝える、ジェスチャーを交えて説明する等）を考え、修正しながら繰り返し実践することができていた。

さらに、録画映像を視聴しながらディクテーションを行えるようにしたことで、他者の気持ちになって英語表現やコミュニケーションを繰り返し見て聞き取ることができたと考える。また、動画を再生しながらプレゼンテーションを行うことで、シナリオの解説や工

夫点等を映像とともに明確に伝えることができたと考ええる。

一方で、英語が聞き取りにくいことや、時間が短いと感じることから、ディクテーションが困難という意見が複数あった。学生への指導として、聞き取りやすい英語の話し方や表現をさらに教授する必要があると考える。また、録画の際に集音マイクを用いる等、録画した英語の音声は清明に聞き取ることができる工夫も必要であると考えられる。さらに、ディクテーションに時間がかかり、ディスカッションの時間が短くなることがあった。ディクテーションするシナリオを事前に決めておくことや、ディスカッションポイントを明示する等して、ディスカッションの時間を確保する工夫も必要と考える。

V. 結論

本稿では、小児看護学領域の学修モデルおよび、小児看護学領域の科目の外観や特徴、実践力強化・国際力強化の取組について論じた。今後は、講義内の取組をより洗練されたものにするため、課題への対策等を行う必要があると考える。

文献

東京大学 CoREF. (2019). 協調学習 授業デザインハンドブック 第3版—「知識構成型ジグソー法」の授業づくり—. <https://ni-coref.or.jp/main/wpcontent/uploads/2019/03/handbook3>